

外文明と内世界

1. 研究組織

研究代表者：西村 重夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

研究分担者：河上 倫逸（京都大学大学院法学研究科・教授）

白石 昌也（横浜市立大学文理学部・教授）

横山 俊夫（京都大学人文科学研究所・助教授）

園田 英弘（国際日本文化研究センター・教授）

弘末 雅士（天理大学国際文化学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

この研究班のねらいは、地域が何らかのまとまりをもって成立する力学を、社会学者と人文科学者が共同で究明しようというところにある。

そこで前提とされているのはおよそあらゆる地域において次の二方向のベクトルが並存しているということである。つまり、一方で、ある地域をそれ自身の固有性によって他と区別し、これを完結した共同世界として形成しようというベクトル、すなわち「内世界」形成へ向かうベクトルがあり、他方で、いくつかの内世界と同質化・共通化・普遍化させようというもう一つのベクトル、すなわち「外文明」がある。ある地域の固有性を把握するということは、内世界と外文明の間のこの連関の様相と相互作用の力学を解明することにほかならない。しかも肝心なことは、これを「外」の挑戦に対する「内」の応戦という視点では毛頭なく、内世界それ自身の主体的営為という視点において捉えることである。「外」はいつも「内」の問題として表われる。「外」は「内」に受容され「内」において定位されていく。このダイナミクスを研究主題とする。

次にわれわれの研究対象は、東南アジアの精神世界である。別言すれば東南アジア世界を物理空間・社会空間・意味空間の三つに分けた際の意味空間が研究対象である。ここに意味空間とはそこに住まう人々によって描き出された世界の姿かたちでありそのイメージである、ということができる。人々は時間についてさらに空間についてどのように了解するのか、その「了解の構造」とはどのようなものなのか、また、人々が共通にあるいは個別的に得ていく日々の経験、それがありきたりの経験であれ、尋常ならざる経験であれ、それに対して、どのようなかたちを与えるのか、そこに認められる「意味の構造」はどのようなものであるのか。これらが、当面の研究課題、研究対象であり、そのために、言語とシンボル（儀礼、神話、民話、倫

理、法、芸術等）を中心とした幅の広い分野が研究対象となる。

この研究は他のさまざまな研究グループとの間の共同研究として進められなければならない。意味空間論という研究分野を物理空間論ないし生態空間論、また社会空間論と連動させることが必要なのである。意味空間が生態空間や社会空間を越えて成立すること、また時として三者が相互に無関係であることはいうまでもない。しかしそのことはこれら三者の間の生き生きとした対話こそがもっとも求められているのである。このような対話と親密な研究交流を通じて、東南アジアを全体的にみる視座は、東南アジア地域以外の研究者を含めることによってはじめて成立可能となるであろう。

このようにして、東南アジアそれ自体の研究を通して、たんに東南アジアだけでなく、広く人類が生み出してきた「文明と文化」についての原理的な問いかけを行ない、そのいくさきについての思索を深めることを目的とする。

3. 平成7年度の研究経過

平成7年度において研究班として3回の研究会を開催した。

これらの研究会の概要は次のとおりである。

7月2日～3日 第1回研究会〔於京都〕

今年度の基本方針について

7月20日～21日 第2回研究会〔於京都〕

「蘭領印度戦争犯罪裁判所 海軍行政地区事件報告」（報告者：西山要）

土屋健治著『インドネシア 思想の系譜』を読む

8月4日～6日 第3回研究会〔於岐阜県平湯温泉および長野県美ヶ原温泉〕

『総合的地域研究』第10号掲載論文の合評会

第1回研究会では、平成7年度における研究会の基本方針について意見を交換した。本研究班の研究代表者であった土屋健治氏は、平成7年2月27日に逝去した。それにともなって研究代表者が西村に交代したが、それによって生じる問題点について話し合い、今年度の研究計画について論議した。

第2回研究会では、初日（7月20日）、元海軍司政官であった西山要氏（前四天王寺国際仏教大学教授、弁護士）をゲスト・スピーカーとして招き、昭和21年9月から昭和22年4月にかけてボルネオ（インドネシア）バリクパパン戦犯の法定弁護人を務めた経験の報告を受けた。

戦争犯罪裁判に関する詳細な体験報告を受け、戦争と犯罪、裁判と弁護に関する論議が展開された。

第2回研究会の2日目（7月21日）は、前研究代表者・土屋健治氏の遺著といえる『インドネシア 思想の系譜』（勁草書房、1994年）を題材として、土屋氏が繰り広げた国民国家論、ナショナリズム論を読み解くことによって、本研究班のテーマである「外文明と内世界」の問題を土屋氏がどのように描こうとしたかについて論じ合った。

第3回研究会は、土屋氏の故郷である長野県松本市他を会場とし、土屋氏の追悼エッセイ集としての色彩が濃い『総合的地域研究』第10号の掲載予定論文を各自が持ち寄り、それについて論議する形式をとった。その成果は、『総合的地域研究』第10号に示されているとおりである。

以上のほか、「外文明と内世界」の研究と関連して、個別に国内調査、海外調査が行われた。

西村は、1995年10月から12月にかけて、カリマンタンのインドネシア・マレーシア国境地帯および北スラウェシのフィリピン国境に近い地域を訪れ、学校調査を行なった。学校教育の活動からナショナリズムの要素、ローカリゼーションの要素、国際化の要素を取り出し、それらがもたらす力学を考察しようとした。

河上は、西欧植民地支配の歴史的意義を、近代日本の果たした役割を視野に収めつつ検討し、植民地の類型学を試みた。具体的には、第二次世界大戦の日本の敗北と戦後処理の問題を、植民地解放独立といった視角から明らかにしようとした。第2回研究会と関連して、インドネシアにおける「戦犯」裁判との関連究明が図られた。

白石は、1995年4月にベトナムを訪問し、宮廷文化（音楽、舞踊）の保存状況、次世代への文化伝統の継承状況、さらに刷新政策のなかにおける伝統文化の位置について調査を行なった。1995年8月から9月にかけては、ベトナム、ラオス、タイを訪れ、ベトナムの経済発展と文化の関わり、ベトナムと近隣諸国の交流状況について調査した。

横山は、大雑書調査に関連して、それを文献研究から裏打ちするため、京都大学人文科学研究所の東アジア媒介事象研究グループの協力を得て、陰陽道関係書を分析した。また国立民族学博物館における共同研究「近代における〈異文化〉像の形成」に参加し、19世紀ヨーロッパの人類学の他者認識の諸相、とくに写真や図像による認識を解明した。このほか、和歌山、滋賀両県において、残存厚冊本節用集類の調査、編著『貝原益軒：天地和楽の文明学』の編集作業にあたった。

園田は、日本に関する一連の地域研究である日本人論・日本文化論を題材として、「日本的

特色」がどのような論理構造のうえに成立しているかを明らかにしようとした。日本文化論は、日本の文化の特色を日本独自の国民性や社会的性格や日本的制度などで明らかにしようとしているが、そうした枠から脱却する方策を検討している。

弘末は、スマトラ島を事例にして、海域東南アジアがインド文明、中国文明、イスラーム文明、西欧文明などの外文明の影響を繰り返し受ながら固有世界を形成したプロセスを解明しようとした。具体的には、13世紀から20世紀にかけてのスマトラ島における国際海洋交易活動を通して、インド文明、イスラーム文明、西欧文明との接触を検討し、これらの文明をもたらした人々がいかなる集団であり、また内世界の形成にどのようにかかわったのかを解明した。

4. 研究の成果とフロンティア

第一に、東南アジア地域研究を専門とする班員からの「外」と「内」の重層的構造を解明する試みが個別具体的に進められた。弘末の場合を例示するならば、近世スマトラの内世界（内陸民族世界の原型）の形成に南インド系移住者の寄与した役割が少なからぬものであったことが明らかになった。従来、彼らがスマトラにおけるインド化やイスラーム化において重要な役割を果たしたことが指摘されてきたが、同時に彼らがスマトラ島において現地人と接触、混交し、内陸部に定住した際に、「土着先住民」という概念の構築に寄与したと考えられる。外文明の導入と内世界の形成とが、彼らの介在を通して同一局面で進行した可能性がある。そしてこの「土着先住民」概念が世界帝国を自任した隆盛した港市国家（例えばアチェ）の周縁部に生じているという興味深い事象が明らかになった。

ベトナムにおける植民地支配の問題を解明しようとする白石、インドネシアにおける国民統合と教育の関係を究明しようとする西村もそれぞれ、「外」と「内」の相互関係について個別具体的に研究を展開させている。

第二に、日本地域研究およびヨーロッパ地域研究を専門とする班員から外文明と内世界の関係をめぐる比較の視座が提示された。横山によると、内世界の統合過程は、単なる物や情報の流れの統合よりも、雅俗意識を核とした多様な礼法の広まりにささえられた文明化の過程であった。そのばあい、地理的な内外の明確なへだてよりも、雅俗の別のほうが強く意識されがちであり、内世界は雅世界として、外世界はその薄まりいくさきとして考えられた。典型例は、貝原益軒の中国観、印度観に見ることができる。

西欧植民地支配の歴史的意義を比較考察している河上、逆決序論を発表して、日本文化の分析枠組が外国文化の分析にも有効であることを明確にしようとした園田もそれぞれ、外文明と

内世界の関係についての新しい視角を提示しようとしている。

5. 今後の課題

今後の課題として以下のことが挙げられる。

(1) 分析枠組の設定

上述したように、個別具体的事例に即した研究は展開しているが、それらを総合するための分析枠組を設定することが課題となる。

(2) 個別の研究成果の推進

共同研究としての統合の必要性は認めながらも、基本的には、個々の実証的な研究を重視する。個々の研究者は、個別具体的な現象のなかに「外文明と内世界」というパラダイムをどのように取り入れていくかをつねに自問しなければならない。

(3) 比較の視点の重視

われわれの研究班は、東南アジア地域の研究者とそれ以外の分野の研究者(日本、西欧)とがほぼ同数からなる。この特徴を生かすために、東南アジアが外からどのように見えるのか、また、東南アジア的なダイナミズムを日本や西欧に適用すると、どの点でどのように不都合が生じるのか、あるいは逆に、日本や西欧の特色がよくみえてくるのかという、空間的な比較を重視したい。しかしそれとともに、方法的にも、歴史学、法政史、文明論、教育学、国際関係論等、多様なので、方法論の間の比較と相互交流についても留意したい。以上のことを踏まえ、最終成果報告書の作成を目標としつつ、研究会等を通じた知的交流をはかる。

6. 研究業績(平成7年度発表分)

西村重夫

"The Development of Pancasila Moral Education in Indonesia," 『東南アジア研究』 33(3): 21-34, 1995.

「紅白旗の色に染まる学校：インドネシア」二宮皓編『世界の学校』福村出版, pp. 181-195, 1995.

「信州教育とジョクジャ教育」『総合的地域研究』10: 24-28, 1995.

「インドネシアから学ぶ「心の教育」」『日本教育』229: 18-21, 1995.

白石昌也

「ベトナムにおける法律整備について」『横浜市立大学論叢』45(1): 191-206, 1995.

- 「ソ連・東欧圏の崩壊とベトナム共産主義者の世界認識」衛藤藩吉先生古稀記念論文集編『20世紀アジアの国際関係』原書房, pp. 159-180, 1995.
- 「ベトナムのアジア太平洋地域認識」岡部達味編『ポスト冷戦のアジア太平洋』日本国際問題研究所, 1995.
- 『ベトナムのラスト・エンペラー』翻訳(ファム・カク・ホエ著)平凡社, 473p. 1995.
- 「ベトナム文化活動」企業メセナ協議会編『メセナ白書1995』pp. 289-293. 1995.
- 「ベトナム：刷新路線のゆくえ」佐藤経明、矢吹晋、白石昌也、丹藤佳紀(編)『変貌するアジアの社会主義国家』三田出版会, pp. 129-186, 1995.
- 「社会主義国家ベトナムの市場経済：対外経済開放政策の現状と将来」白石昌也・糸賀了・渡辺英緒編『ベトナムビジネスのルール』日経BP出版センター, pp. 1-61, 1995.
- 『ベトナムのラスト・エンペラー』翻訳(ファム・カク・ホエ)平凡社, 1995.
- 「「想像の共同体」から「国民国家」へ：土屋健治著『インドネシア 思想の系譜』によせて」『総合的地域研究』10: 5-8, 1995.

横山俊夫

- 「日本文化研究誕生のころ：十九世紀イギリスを中心に」『国際交流』67: 18-25, 1995.
- 「土屋健治さんの「アルマナック・ムラユ論」」『総合的地域研究』10: 9-14, 1995.
- "Die Rolle der Setsuyoshu im Zivilisationsund Kultur prozess," S. Formanek und S. Linhart, (eds.) *Buch und Bild als gesellschaftliches Kommunikationsmittel in Japan einst und jetzt*, Wien: Literas, pp. 75-92, 1995.
- 『貝原益軒：天地和楽の文明学』平凡社, 388p. 1995.
- "Gaijin : Fremde in Japan," A. Ueda, (ed.) *Die elektrische Geisha, Entdeckungsreisen in Japans Alltagskultur*, Gottingen: Gunter Peperkorn, pp. 175-184, 1995.

園田英弘

- 「『外文明と内世界』について」『総合的地域研究』10: 15-17, 1995.

弘末雅士

- "Survey of Research Institutions in Indonesia: the Development of National, Regional and Interregional Studies in Indonesia," *Asian Research Trends*, 5: 115-134, 1995.
- 「北スマトラとシュリーヴィジャヤ」『Museum東京国立博物館美術誌』537: 14-22, 1995.
- 「東南アジア」三浦徹・東長靖・黒木英充編『講座イスラーム世界 別巻イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所, pp. 180-186, 1995.
- 「近世スマトラ島の内世界の形成と南インド出身者」『総合的地域研究』10: 18-23, 1995.